

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 29 年 5 月 31 日現在

機関番号：32407

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2016

課題番号：26820273

研究課題名(和文)シーボルトが見た日本の近世町家とその室内意匠の特質

研究課題名(英文)CHARACTERISTICS OF INTERIOR DESIGN OF THE EARLY MODERN JAPANESE TOWNHOUSE AS PERCEIVED BY P.F. VON SIEBOLD

研究代表者

野口 憲治 (NOGUCHI, Kenji)

日本工業大学・工学部・助手

研究者番号：30337513

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、シーボルト・コレクションの町家模型を分析し、近世町家の室内意匠の特質を明らかにする。町家模型の主な建築的特徴は、長崎の町家と共通した。その一部である「名主の住まい」模型は、長崎本博多町の町乙名の役宅をモデルとしたことを明らかにした。さらに、他の模型も長崎の町家をモデルとした。また、シーボルトは、商種・生業、階層によって建物の規模・外観・室内意匠が異なることを理解し、日本の町並みの特徴と景観を伝えようとした。町家模型からは、当時の町家意匠を商種・生業にあわせて検討する事が可能である。

研究成果の概要(英文)：This study analyze the townhouse model of the Siebold collection and clarify the characteristics of the interior design of early modern townhouses. The townhouse model shares the same main architectural features of Nagasaki townhouses. The town headmen residence model was based on the official residence of Machiotona from Motohakatamachi, Nagasaki. Furthermore, other models were also based on the townhouses of Nagasaki. And Siebold understood that the building size, appearance and interior designs differed depending on the trade, livelihood, and class level, and he tried to portray the features and landscapes of the Japanese streetscape. From the Townhouse Model, it is possible to analyze townhouse designs of that period along with the industries and occupations therein.

研究分野：近世町家

キーワード：町家 町家模型 長崎 シーボルト ライデン国立民族学博物館 室内意匠

## 1. 研究開始当初の背景

### (1) 研究の出発点

本研究の出発点として、民家形式の風土決定論への根本的疑問がある。近世町家の形式は、気候・風土のみによって決定されるのではなく、文化的伝播や藩の都市政策など、多様な要因により形成されていることを、明らかにする必要がある。そこで、町家形式の形成要因について、気候風土や都市規模などが近い金沢と仙台の町家形式を比較し、屋根葺材や庇下通路の有無などの違いは、江戸や京都からの文化的影響であることを指摘した<sup>1)</sup>。

### (2) これまでの成果

次の展開として、西欧人が見た日本の近世町家に着目した。オランダのライデン国立民族学博物館(以下、ライデン博)には、シーボルト、ブロンホフ、フィッセルによって収集された多種多様な町家等の模型が所蔵されている。模型は、文化14(1817)年から文政12(1829)年に収集された。なかでも、シーボルト・コレクションの町家等の模型(9棟)は、町並みを示す模型と単独の模型に大別される。町並みを示す模型の各町家には、商種・生業を示す呼称が付けられ、商品を並べるなど、それを特徴付ける工夫もされている。町並みを示す模型は、商種・生業、階層に合わせて建物の規模を変え、大・中・小の3種類を組み合わせている。つまり、シーボルトは、商種・生業、階層によって建物の規模や室内意匠が異なることを理解し、日本の町並みの特徴と景観を伝えようとした<sup>2)</sup>。

本研究は、この成果を発展させ、シーボルトが見た日本の近世町家の室内意匠の特質を明らかにする。

## 2. 研究の目的

19世紀初め、シーボルトは、町家の室内意匠が職業や建物の使い方によって異なることに着目し、模型や挿図などに遺した。なかでも町家等の模型は、外観の特徴ばかりでなく、襖絵などの室内意匠も正確に日本人の職人によって製作された。現存町家遺構が歴史的な増改築の結果であるのに対して、模型からは19世紀初めの「醤油屋」や「酒屋」、「魚屋」など幅広い職業の建物の様相を知ることができる。

本研究では、シーボルト・コレクションの町家模型が、長崎の町家をモデルとして製作されたことを明らかにする。つぎに、町家模

型からみた長崎の町家の座敷意匠の特質を明らかにする。

## 3. 研究の方法

本研究は、ライデン博に所蔵されている模型と長崎の町家に関する絵画、写真、文献史料と併せて検討する。

### (1) 模型の外観・室内意匠の分析

模型の外観・室内意匠の各要素を抽出し、商種・生業、階層との対応関係を分析する。

### (2) 絵画史料などからみた長崎の町家の分析

出島絵師川原慶賀が描いた長崎の町家に関する絵画や『長崎名所図会』などに描かれた町家と模型を比較する。慶賀が描いた長崎の町家の絵には、多種多様な商種・生業の町家の室内が描かれている。その様相には、縮緬の唐紙が貼られた襖など、模型の襖との共通点を見ることができる。それらの絵画史料と模型を比較検討し、商種・生業、階層との対応関係を検討する。

また、長崎に現存する同時代の町家遺構の特徴と比較検討する。

### (3) 町触などの分析

『長崎御役所留』や『長崎市中明細書』、『町方御用留』などに記載された家作制限に関する触書を分析し、模型の室内意匠との対応関係を検討する。



図1 町並み①  
「名主の住まい・醤油屋・番人小屋」



図1 町並み②  
「酒屋・呉服屋(綿織物)・日雇い人の家」



図2 町並み③  
「呉服屋(絹織物)・魚屋・菓子屋・フロヤ」

表1 町家模型および長崎の町家の特徴

模型	呼称	外観の特徴(※一は無しを示す)			
		屋根形式	屋根	外壁	尾垂れ
町並み①	名主の住まい(S1)	入母屋	丸椽瓦葺	目板張・真壁白漆喰塗	-
	醤油屋(S1)	切妻	丸椽瓦葺	目板張	有
	番人小屋(S2)	切妻	丸椽瓦葺	目板張・真壁白漆喰塗	-
町並み②	酒屋(S3)	入母屋	丸椽瓦葺	目板張・真壁白漆喰塗	有
	呉服屋(綿織物)(S3)	切妻	丸椽瓦葺	目板張	-
	日雇い人の家(S3)	切妻	丸椽瓦葺	杉皮竹押さえ	-
町並み③	呉服屋(絹織物)(S4)	入母屋	丸椽瓦葺	目板張・真壁白漆喰塗	有
	魚屋・菓子屋(S4)	切妻	石置板葺	目板張・真壁白漆喰塗	-
	フロヤ(S5)	切妻	板葺	薄い木の皮を貼る・土塗真壁	-
屋敷(S7)	入母屋	丸椽瓦葺	目板張・真壁白漆喰塗	-	
長崎の町家	三上家住宅(図2)	切妻	丸椽瓦葺	目板張	-
	松尾家(現存せず)(図3)	切妻	丸椽瓦葺	目板張	有
	油屋町の町家(現存せず)(図4)	入母屋/切妻	丸椽瓦葺	不明	不明
	諏訪町の町家(写真)(図5)	切妻	丸椽瓦葺	目板張	有
	『春米屋・酒屋・豆腐屋』(絵画)(図9)	切妻	不明	目板張	有

棟瓦	外観の細部の特徴			通り土間
	けらば	2階窓手摺りの雨戸	虫籠窓	
鬼瓦	白漆喰塗	有	有	1間/一部1間半
丸瓦	白漆喰塗	有	-	1間半・L型/一部1間
丸瓦	白漆喰塗	-	-	-
丸瓦	白漆喰塗	有	有	1間半・L型
丸瓦	白漆喰塗	有	-	1間/一部半間
丸瓦	不明	-	-	半間/一部1間
鬼瓦	白漆喰塗	有	有	1間/一部1間半
-	破風板(菓子屋)	-	-	1間(魚屋)/半間・一部1間(菓子屋)
-	-	-	-	-
鬼瓦	白漆喰塗	-	-	1間/一部1間半
鬼瓦	破風板	有	-	1間
鬼瓦	不明	有	-	1間
丸瓦	白漆喰塗	不明	不明	不明
丸瓦	破風板	有	-	不明
丸瓦	破風板	有	-	2間

#### 4. 研究成果

##### (1) シーボルト・コレクションの町家模型のモデルは長崎の町家

町家模型のモデルとなった地域は、シーボルトが暮らした長崎のみならず江戸参府中（文政9（1826）年）に実見した江戸や京都、大坂などの可能性がある。残念ながら、参府中の日記（シーボルト『日本』所収）には、町家模型のモデルとなった地域を特定する記述はない。シーボルトは、江戸参府後に、長崎近郊の小瀬戸で調査を実施し、「農家」模型を日本の職人に製作させた<sup>3)</sup>。したがって、調査や製作に期間を要する町家模型も、シーボルトが暮らした長崎の町家をモデルに発注したと考えるのが妥当である。

**①町家模型の建築的特徴** 町家模型は複数棟で町並みを構成しており、町並み①「名主の住まい・醤油屋・番人小屋」、町並み②「酒屋・呉服屋（綿織物）・日雇い人の家」、町並み③「呉服屋（絹織物）・魚屋・菓子屋・フロヤ」がある（図1）。建築細部の主な特徴は、①丸棧瓦葺、②屋根の棟の端部を丸瓦で納める、③けらばを白漆喰で納める、④2階窓手摺りの外側に一本引きの雨戸、⑤尾垂、⑥目板張りの外壁、である（表1）。

##### ②現存遺構・写真・絵画からみた長崎の町家

三上家（長崎市梅ヶ崎町）は、長崎に現存する最古の町家である（図2）。建築年代は不明であるが、松尾家（長崎市馬町、嘉永5（1852）年、現存せず）（図3）より少し古いとされる<sup>4)</sup>。三上家や松尾家を見ると、丸棧瓦葺<sup>5)</sup>など細部の特徴が模型とよく一致する（表1）。また、長崎市油屋町の町家（現存せず、図4）や明治期の諏訪町の町家の細部の特徴ともよく一致する（図5、表1）。また、模型の間取りをみると、通り土間があり、それに沿って部屋が配される。この平面形式は、三上家や松尾家の間取りとよく一致する（図6、7、8）。つぎに、出島絵師川原慶賀が描いた長崎の町家を見ると、棟の端部を丸瓦で納める、2階窓手摺りの外側に雨戸など、模型の特徴と一致する（図9、表1）。

したがって、シーボルト・コレクションの町家模型は、長崎の町家をモデルとして製作された可能性が高い。

##### ③「名主の住まい」模型は長崎の町乙名の役宅

町並み①の一部である「名主の住まい」模型は、門、玄関、式台、大戸を備え、門の脇には、触書がある（図10）。門を潜ると前庭があり、玄関の前には火消道具が置かれている（図11）。

触書には、以下が記されている<sup>6)</sup>。

定

- 一 市中郷中唐紅毛抜荷由荷物不携之事
  - 一 喧嘩口論之事右條々堅く相守者也
- 子 六月

年紀はないが、「子」の年の6月であることが分かる。最初の条文は、市中郷中におい



図2 三上家



図3 松尾家

『長崎県の民家(後編)』所収

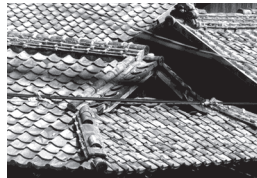


図4 油屋町の町家



図5 諏訪町の町家

長崎大学附属図書館所蔵

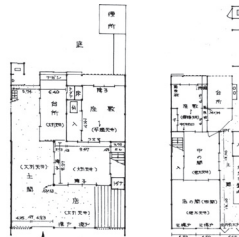


図6 三上家(左)

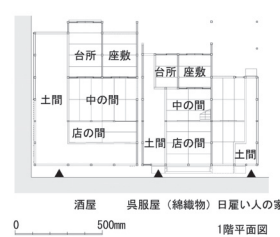


図8 「酒屋・呉服屋(綿織物)・日雇い人の家」  
1階平面図

図7 松尾家(右)

1階平面図

『長崎県の民家(後編)』所収



図9 『春米屋・酒屋・豆腐屋』  
(ライデン国立民族学博物館所蔵)



図10 「名主の住まい」模型の  
門の脇に掲げられた触書



図11 火消道具 図12『みゆきの先とも』

て唐紅毛との抜荷を禁止する内容である。唐紅毛とは、唐人やオランダ人を指す。当時の日本で、オランダ人との貿易が許された町は長崎だけである。つまり、この触書は、長崎に限られたものである。

つぎに、火消道具に着目する。火消道具は

「ウチワ」2柄、「トヒグチ」1挺、「クマデ」1挺の3種類である。「ウチワ」には、「本」と読める町印が描かれている(図11)。

長崎には、「本」が付く町が10町ある<sup>7)</sup>。長崎の町においては、数町ごとに火消組が組織され、出火の際の詰所が指定されている。また、町ごとに火消道具を設置することも定められている<sup>8)</sup>。

町印を知る絵画史料として『みゆきの先とも』(長崎歴史文化博物館所蔵、明治38(1905)年頃)がある<sup>9)</sup>。この先頭ページには、各町の町印が記された提灯が描かれている(図12)。「本」から始まる町印が記された提灯は五つあり、その中で「本」の一字を使う提灯は、本博多町に限られる(図12)。

長崎の町には、町乙名と呼ばれる地役人がおり、職務として、諸制令(町触)の布達<sup>10)</sup>、抜荷の取り締まり<sup>11)</sup>、出火の際には町内の火消を引き連れて火元へ出かけ詰所に詰めることが定められている<sup>12)</sup>。つまり、「名主の住まい」模型は、長崎本博多町の町乙名の役宅をモデルとした。

## (2) シーボルト・コレクションの町家模型の座敷意匠の特質

### ① 町家模型からみた座敷意匠の特質

模型から読み取れる座敷意匠を、表2に示す。畳は、い草をそのまま使ったものと、花莫蔭風などの柄が入るものに大別できる。壁は、色土壁で、紺色の腰張が貼られる。この様相は、床の間のある座敷に限らず、様々な座敷でみることができる。1階の店舗部分や畳の間の根太天井は、模型では一枚板で表現している。いっぽう、床の間のある座敷は、竿縁または唐紙を貼った天井である。床の間は、壁を色土壁または唐紙の貼付で仕上げる。床柱は面皮で、床框は素木または黒塗である。床脇には、天袋または違棚がある。襖には唐紙を貼るか絵が描かれ、襖の框は黒塗である。障子の框は、黒塗と素木を使い分ける。

### ② 商種・生業別による座敷意匠の格式表現

町家模型の座敷意匠から、いくつか特徴的な組み合わせを抽出し、商種・生業別による座敷意匠の格式表現を検討する。

表2に示すように、1階の座敷にある襖の多くは唐紙貼である。その紋様は、縮緬縞、五七の桐、草花などである。いっぽう、接客性の高い2階の床の間のある座敷の襖には絵が描かれる。また、床の間を設える町家は、接客の必要性がある商種・生業の建物である。例えば、呉服屋には、綿織物と絹織物の2種があり、同じ呉服屋であっても座敷意匠が異なる。綿織物を扱う呉服屋は、2階の座敷には床の間がない。いっぽう、絹織物を扱う呉服屋の2階の座敷には床の間がある。また、1階の座敷にも床の間がある。

綿織物を扱う呉服屋の2階は、綿を打つ作業場所である。また、天井を張らない厨子2階である(図13)。いっぽう、絹織物を扱う呉服屋の2階は、接客を目的とした座敷で

ある(図14)。1階の床の間のある座敷も同様である。つまり、扱う商品によって接客の有無があり、それに合わせた座敷の格式を表現している。

### ③ 家作制限令からみた長崎の町家の

#### 座敷意匠の特質

幕府は、幕府直轄領である長崎に、町家の家作に関する町触を、寛文8(1668)年に出している<sup>13)</sup>。

- 一 町人屋作致軽少、なけし、杉戸、付書院、くしかた、ほり物、くミもの無用、床ふち、さんかまち塗候事并から紙張付停止の事  
付、遊山船金銀の紋、座敷の内、絵書申間敷事

これによると、建具の框を塗る事、唐紙の張付、遊山船や金銀の紋の絵を描くことなどを禁じている。その後も度々節儉令が出されており、天保13(1842)年には、家作を美しくすること、3階または異風にすることを禁じている<sup>14)</sup>。

家作制限令では、長崎の町家で広く使われ、町家模型でも確認できる座敷意匠が禁止されており、当時の状況は制限令と乖離する。つまり、華やかな室内意匠は、制限令にも関わらず一般化していた。

### (3) まとめ

シーボルト・コレクションの町家模型は、細部・平面とも長崎の町家の特徴とよく一致する。さらに、その一部である「名主の住まい」模型は、長崎本博多町の町家乙名の役宅をモデルとしたことが明らかである。したがって、シーボルト・コレクションの町家模型は、長崎の町家をモデルにしたことになる。

シーボルトは、長崎の町家の建築的特徴や地域性を正確に理解し、模型を日本人の職人に製作させた。また、多様な商種・生業、身分・階層の町家を取り上げ、これらの違いが規模や意匠と対応関係にあることを伝えている。

町家模型の座敷には、唐紙を貼った襖、絵が描かれた襖、襖や障子の框の黒塗、紺色の腰張などの特徴がある。これらの座敷意匠は、商家から身分の高い人物の屋敷までに広く使われている。

商種・生業別に座敷意匠の格式表現をみると、1階と2階では襖の仕上が異なる。接客性の高い2階の床の間のある座敷には、襖絵が使われている。また、商種・生業によって2階の座敷意匠が異なる。

これまで、長崎の近世町家を知る史料は、現存遺構、絵画、明治期に撮影された写真に限られていた。シーボルトの模型は、長崎の町家の地域的特徴、生活様態、格式までを示しており、現存遺構では知ることができない19世紀初めの様相を、分析することができる。



## 注

- 1) 平成 15～17 年度科学研究費補助金基盤研究(C)「町家形式の風土決定論に対する批判的再検討 -金沢・仙台城下を事例に-」、研究代表者：波多野純、研究分担者：野口憲治
- 2) 平成 18～20 年度科学研究費補助金基盤研究(C)「西欧人の見た近世町家の特質と地方性-ライデン博物館所蔵模型の検討を中心に-」、平成 21～23 年度科学研究費補助金基盤研究(C)「近世町家の形成と多様な形式の発生要因-オランダ商館長などの記録を基礎史料に-」、研究代表者：波多野純、研究分担者：野口憲治
- 3) 野口憲治・波多野純「シーボルトが調査した長崎の民家とシーボルト『日本』との関連について 西欧人の見た近世町家の特質と地方性の研究(4)」2011 年度日本建築学会大会学術講演梗概集 F-2 分冊、pp. 541～542 2011 年
- 4) 長崎県教育委員会文化課『長崎県の民家(後編)』長崎県教育委員会 1974 年
- 5) 丸棧瓦は、史跡出島和蘭商館跡内から発掘されている(波多野純建築設計室『国指定史跡「出島和蘭商館跡」西側 5 棟建造物復元工事報告書 一番船船頭部屋・一番蔵・二番蔵・ヘトル部屋・料理部屋』長崎市教育委員会 2001 年)
- 6) 触書の解説において、シーボルト記念館館長・織田毅氏からご教示を頂いた。
- 7) 「本」が付く町は、本籠町、本古川町、本下町、本大工町、本石灰町、本紙屋町、本紺屋町、本博多町、本興善町、本五島町である。
- 8) 『続長崎寛録大成』長崎文献社 1974 年 pp. 454-455
- 9) 『みゆきの先とも』は、長崎の諏訪神社の例大祭である「長崎くんち」で使われる踊町の傘鉾を描いた画集である。
- 10) 長崎県史編纂委員会『長崎県史 対外交渉編』長崎県 1985 p426
- 11) 小島小五郎「長崎町乙名の加役」『社会科学論叢 16』1967 pp. 1-16
- 12) 注 11) 前掲書
- 13) 安高啓明『近世長崎司法制度の研究』思文閣出版 2010 年
- 14) 長崎市役所編『長崎叢書 下』1973 年

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 2 件)

- ①野口憲治・波多野純、ライデン国立民族学博物館所蔵町家模型の特質 -ライデン国立民族学博物館所蔵町家模型からみた日本の近世町家1-、日本建築学会計画系論文集、第 82 巻、第 733 号、pp.757-766、2017 年 3 月、査読有

DOI: <http://doi.org/10.3130/aija.82.757>

- ②野口憲治・波多野純、シーボルト再来日の鳴滝塾の建物について、シーボルト記念館『鳴滝紀要』、第 26 号、pp.85-103、2016 年 3 月、査読有

〔学会発表〕(計 6 件)

- ①Kenji Noguchi, Jun Hatano, The townhouse use models at Siebold were created according to the image of a typical townhouse in Nagasaki, THE TENTH INTERNATIONAL SIEBOLD COLLECTION CONFERENCE 2016, 日本博物館シーボルトハウス・国立歴史民俗博物館、2016 年 10 月 21 日、長崎ブリックホール(長崎県長崎市)、プロシーディング査読あり

- ②野口憲治・波多野純、ライデン国立民族学博物館所蔵「フロヤ模型」について -西欧人の見た近世町家の特質と地方性の研究(9)-、2016 年度日本建築学会大会学術講演梗概集(日本建築学会)建築歴史・意匠、pp.503～504、2016 年 8 月 24 日、福岡大学(福岡県福岡市)

- ③Kenji Noguchi, Jun Hatano, The reconstruction of the Narutakijuku after an old photograph, THE NINTH INTERNATIONAL SIEBOLD COLLECTION CONFERENCE 2015, 日本博物館シーボルトハウス、2015 年 10 月 23 日、ライデン(オランダ)

- ④野口憲治・波多野純、蘭人止宿所模様替仕訳書にみる長崎の民家の特質 -西欧人の見た近世町家の特質と地方性の研究(8)-、2015 年度日本建築学会大会学術講演梗概集(日本建築学会)建築歴史・意匠、pp.257～258、2015 年 9 月 4 日、東海大学(神奈川県平塚市)

- ⑤野口憲治・波多野純、蘭人止宿所と鳴滝塾から見る長崎の民家の特質 -西欧人の見た近世町家の特質と地方性の研究(7)-、2014 年度第 85 回日本建築学会関東支部研究発表会(日本建築学会関東支部)研究報告集Ⅱ、pp.581～584、2015 年 3 月 3 日、日本大学(東京都千代田区)

- ⑥野口憲治・波多野純、鳴滝塾とミュンヘン国立民族学博物館所蔵模型 -西欧人の見た近世町家の特質と地方性の研究(6)-、2014 年度日本建築学会大会学術講演梗概集(日本建築学会)建築歴史・意匠、pp.50～51、2014 年 9 月 12 日、神戸大学(兵庫県神戸市)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

野口 憲治 (NOGUCHI, Kenji)  
日本工業大学・工学部・助手  
研究者番号：3 0 3 3 7 5 1 3

### (4) 研究協力者

波多野 純 (HATANO, Jun)  
日本工業大学・工学部・教授  
研究者番号：4 0 0 4 9 7 2 1  
マティ・フォラー (Matthi, Forrer)  
ライデン国立民族学博物館シニア研究員